

JANU

国立大学協会情報誌
Quarterly Report

vol. 13
July 2009

日本の文化と
伝統を支える
国立大学

お茶の水女子大学

弘前大学

滋賀医科大学

熊本大学

香川大学

新潟大学

旭川医科大学

広島大学

愛知教育大学

OPINION

日本学術会議会長 金澤一郎氏

支部通信

帯広畜産大学

宮城教育大学

電気通信大学

山梨大学

富山大学

奈良先端科学技術大学院大学

徳島大学

佐賀大学

今、学生は！

福島大学 陸上競技部

青木 沙弥佳さん

茶

加



特集

FOUND OUT!!

情報と経済のグローバル化が急速に進む世界の中で、
日本社会と文化のアイデンティティ構築と存続は
きわめて重要な命題となっています。
「文化と伝統」を過去から現在まで継承し、そして未来に
向けて創造していくために、国立大学が推進する教育、
研究、交流、地域貢献の現状を、
毎号“学ブ・創ル・究メル・伝エル”の4つの切り口で
紹介します。今号の重点ポイントは「学ブ」です。

日本の文化と伝統を支える国立大学

今号の重点ポイント

伝ー究ー創ー学ブ

学

今号の重点ポイント

ブ

日本学研究者育成のための
国際的・学際的な教育ネットワーク構築

From お茶の水女子大学

お茶の水女子大学では、文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」に採択された教育プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」を実施しています。人文系の大学院生の国際的コミュニケーション能力を練磨し、それとともに、日本文化の研究の担い手として、国際レベルでの社会・文化貢献をなすために必要な能力、知識、思考力を涵養しようとするものです。

この教育プログラムでは、(a)海外の大学で授業実習を行う「海外インターンシップ」や、海外の研究者と専門的な討論実習を行う「海外アカデミック・ディスカッション」を始めとする「国際的な現場での教育」、(b)同大学に蓄積されている日本研究関係の知的資源を活用して、「日本学研究コーパス」をつくり、電子メディアを利用して広く海外に発信することを通じて国際的情報伝達のノウハウを学ぶ「情報伝達スキルの練磨」、(c)学生が、自分の特定の研究専門領域だけでなく、学際的・総合的な視点から、日本的思维方法と文化を広く、深く理解できるようにするために、副専攻として「日本文化論」科目群を設けるという3本の柱からなります。

海外への院生の派遣やTV会議システムの活用によって、日常的に世界における日本研究の先進校である大学と国際共同ゼミや公開講演会を実施するとともに、それらの大

学の教員・院生を同大学に招き、国際日本学コンソーシアムによるジョイントゼミを開催しています。平成20年度の国際日本学コンソーシアムでは、「日本語学」、「歴史学」、「日本文学」、「日本語教育学」、「日本思想」と各部会に分かれた講演・研究発表が行われ、国際的な広い視野から、世界に通用する高い水準の研究を構築する機会を持つことができました。

今日の国際社会では、男女が差別なしに共に社会・文化に貢献することが当然となりつつあり、国内外の大学や研究機関だけでなく、文化機関や国際政治機関などにも、ますます高い能力をもった女性の進出が期待されています。本教育プログラムによって、そうした国際社会の要請に応える人材のさらなる育成が期待されます。



国際共同ゼミ

TV会議システムを利用した遠隔ジョイントゼミ



第3回国際日本学コンソーシアム「日本語学部会」



海外の研究者を招いての呈茶会

弘前大学白神自然観察園を通じた環境教育

From 弘前大学

昨年は青森県と秋田県にまたがる白神山地の中心部が世界自然遺産に登録されてから15年の節目の年でありましたが、同年弘前大学では世界自然遺産地域に隣接する場所に、約18haの民有地を借り受け、環境教育に資する施設や観察道を整備し、教育をはじめ、研究、地域貢献の拠点を創設することとしました。また、この施設は弘前大学の創立60周年を記念した、教育研究機能を備えた同大学のシンボルでもあります。ここは、白神山地のブナ林にみられる代表的な植物や、植物以外の自然の観察が可能な場所であり、かつ白神の自然と人間の生活との関わりを知るには最適の場所なので、名称を「弘前大学白神自然観察園」としました。

同観察園は、白神山地世界遺産地域屈指の観光地である青森県西目屋村の暗門溪谷にいたる途中にあり、岩木川支流の大沢川と大川の間にある最高点約400mの丘陵の一部です。白神山地のブナ林に見られるシラネアオイ・カタクリ・イワウチワなど代表的な植物はすべてそろっています。また、ニホンザルやニホンカモシカによるコシアブラやトチノキの食痕、ツキノワグマの採餌痕であるクマだなも観察されます。残雪期の春植物の咲く頃と積雪期のアニマルトラッキングを行うのに最適のコースです。さらに、丘の頂には、この地域の開田や暗門溪谷の観光開発に功績のあった斉藤主（さいとうつかさ）氏を記念する塔が約20mの威容をみせ（この塔最上階からは向白神岳に連なる白神山地の主稜線まで見えます）、人と白神山地の歴史的な関わりも垣間見ることが出来ます。

この施設の第一の目的は、今日の教育のひとつの主流となっている環境教育のモデル施設を現場の教員の声を取り入

クマだな（ツキノワグマの食痕）



白神教育研究林

れて、全国に先駆けて創り上げていくことです。そのため、案内板の記事や小中学生の教材としての効果を、実際に指導に当たっている教員の意見や視点を取り入れ、改良改善しつつ、つくり上げる試みを計画しています。さらに、教育研究の新しい試みのポイントとして、赤外線カメラによる夜の動物のモニタリングや、自然生態系の基礎的なデータや蓄積や公開を目指しています。また、白神山地には、マタギという狩猟活動を生活の糧にしてきた人々の文化や伝統が存在します。マタギをはじめ白神山地で生活してきた人々が、利用した植物や動物、これら限られた資源を利用、管理し持続的な生活を維持してきた環境管理の技法や思想についての説明を展示しています。さらに、地域より求められている白神のガイドに対する知識の供与、社会人教育、白神山地周辺に位置する関連施設の環境教育のアドバイスなどを通じた地域貢献も同施設の役割として位置づけ、活動することを柱としています。

小中学生から大人までの白神山地に関するあるいは環境教育に関する学びの拠点が同施設の目標です。

創 ル

薬剤耐性変異株に有効なエイズ治療薬の開発に成功

From 熊本大学

1981年に出現したエイズ。熊本大学医学部薬学研究部の満屋裕明教授は、感染経路が不明の頃から米国国立癌研究所で治療法開発に取り組み、世界で初めてエイズ治療薬を発見しました。その後も第2、第3の治療薬を開発し、世界のエイズ治療をリードしています。満屋教授グループが同大学で開発した薬剤耐性変異株に有効なエイズ治療薬ダルナビルは2007年末から日本でも臨床に供されています。同グループが属する学内プロジェクトでは他の難治性感染症に対する治療法開発と、若手研究者の育成が進められています。



※ダルナビルは、他のプロテアーゼ阻害剤が標的アミノ酸の側鎖と結合するのと異なり、主鎖と結合するのでHIVが標的アミノ酸に変異を起こしても主鎖には変化が起りにくいため耐性株に対しても強い活性を発揮。またHIVの耐性獲得を遅延させる。

2008年度打ち上げ 四国初香川発超小型人工衛星STARS

From 香川大学

香川大学工学部能見研究室で作った人工衛星「STARS」が、2008年度JAXAのH2Aロケットで打ち上げられました。STARSは、親子衛星として2機を同時に打ち上げる、親子を連結するテザー（ひも）伸張により大型システムになる、ロボット衛星とし



A:カタクリの実 B:ササバギラン C:エンハルゼミの抜け殻 D:ホウキの花 E:ユキザサ F:ウラジロヨウラク G:チゴユリ H:アオマムシグサ I:マイズルソウ J:イワウチワ K:コシアブラ L:ギンリョウソウ M:モリアオガエルの卵

て宇宙空間で動く、という3つ大きな特徴をもっています。研究室を中心に有志の学生が参加し、宇宙開発未経験の香川周辺企業、試験機関と協力し、産学官連携で開発してきました。「地方大学の宇宙開発は、地域に宇宙を身近に感じてもらう、宇宙技術を感じて欲しい」と地域をサポートをつのり、無線体験やペーパークラフト教室、公開実験を中心に、各種イベントで紹介しています。



STARS (KUKAI 軌道上イメージ)

究メル

イネ高温登熟による白未熟粒発生の謎を解く

From 新潟大学

地球温暖化に伴う高温化による米の品質低下が新潟地域でも多発しています。今後さらに高温被害米が増加することが懸念されており、高温ストレスに強いイネの開発が期待されています。新潟大学農学部では高温登熟で生じる白未熟粒発生の分子メカニズムの解明という基礎研究を行うとともに、国や新潟県

にも、国や新潟県

と連携し、白未熟粒発生

の原因の一つと考えられる

デンプン集積抑制酵素の

遺伝子を欠損させた高

温耐性コシヒカリの開発

に取り組んでいます。



イネ変異体掛合せ実験

医学生・看護学生が「地域の魅力」を「学ぶ」

From 滋賀医科大学

滋賀医科大学では、2008年から地域の医療の担い手を地域との連携で育てる「地域『里親』」による医学生支援プログラムに取り組んでいます。このプログラムは、「将来、滋賀県で医療活動を行うことを希望する学生を、地域の先輩医師や看護師、保健師、助産師の方々や住民の方々に『里親』『プチ里親』になつていただき、大学と一緒に育てよう」というものです。文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」として2007年度に採択されました。

このプログラムを企画した背景には、日本全体を覆っている医師不足問題があります。残念ながら、滋賀県も例外ではなく、人口あたりの医師数も診療所数も病院ベッド数も全国平均に遠く及びません。その一方で、滋賀県は全国でも珍しい人口増加県で、高齢者医療に加えて産科や小児科の需要が今後増加することが予測されています。少々の困難があつても地元で頑張ってくれる医師や看護師が今後増加しなければ、滋賀県の医療は深刻な状況に陥ります。2007年に同大学学生に実施した調査では、学生の約10%は将来「是非滋賀県で働きたい」と考えており、「滋賀県で働いてもいい」と考える学生を含めると50%以上が、地元で働くことを将来の選択肢としていました。まずは、こうした学生たちに滋賀県の魅力や働きがい伝え、「滋賀県で働きたい」という学生の初心を支える取り組みとして本プログラムが企画されました。

実際に『里親』との連携が始まった学生からは、親しくメールを交わしていることや、クラブの先輩である『里親』とテニスを一緒にできたことなど、うれしそうな報告を受けています。夏冬に行った宿泊研修では、へき地診療を支える医師や



朽木診療所の院長から説明を受ける学生

遠隔医療の推進

From 旭川医科大学

遠隔医療は、ブロードバンドなどのネットワークにより、画像や動画を転送し医療に活用する技術です。医療とICTの融合により発展を続けている分野であり、現在は、エックス線画像診断、病理診断、患者とのやり取りによる診断、手術指導などが行われています。また、既に旭川医科大学では3Dハイビジョン動画の伝送や、通信衛星の利用、携帯端末ネットワークなど既存のインフラを利用した通信技術の開発が進められています。

同大学では、国内唯一の「遠隔医療センター」を中心に、地域間の医療格差解消に向け遠隔医療の普及に取り組んでいます。



手術映像をアジアブロードバンド回線により海外へ伝送する実験

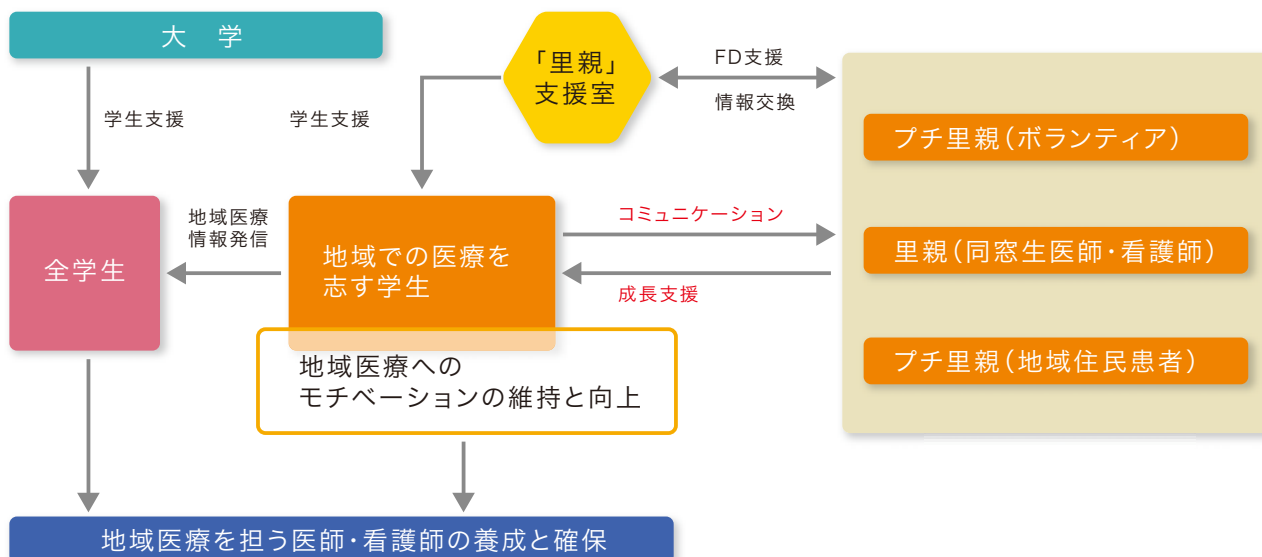
伝エール

地域と大学を結ぶ総合博物館

From 広島大学

平成18年10月に開館した総合博物館は、「地域密着型」で「小さいながらも質の高い博物館」を目指しています。展示のメインテーマは「環境と人間との共生」です。地元東広島市の里山・里海の世界や文化の展示物を中心に、動植物や化石の標本など500点余りを展示しています。また、キャンパスまるごと博

地域「里親」医学生支援プログラム



杉野出張診療所において地元患者さんとの交流会

看護師の姿に接し、また、その医療に支えられた患者さんたちとの交流を通じて、医療人の働きがいや医療の役割を学んだようです。研修先で接した豊かな自然や、『プ千里親』から学んだ地域の文化や生活の魅力、そして、味わた郷土料理なども、地元への理解を深めることに役立ちました。

同大学のこうした取り組みは始まったばかりですが、マスコミ報道などを通じて県民や地域行政からも関心が寄せられ、さまざまな協力の申し出を受けています。大学が地域と連携して医療の将来を担う学生にどのような「学び」を創りだせるのか、「地域『里親』」による医学生支援プログラムは大学としても新たな挑戦と考えています。



チェンバレン氏

From 愛知教育大学

From 愛知教育大学

チエンバレン・杉浦文庫は、英人バジル・ホール・チエンバレン氏（1850～1935）と岡崎市生まれ杉浦藤四郎氏（1883～1968）の蔵書、書簡などからなる文庫です。チエンバレン氏は、その一生を古事記を始め各種文学書の翻訳から言語学研究など、卓越した語学力で日本文化に貢献した旧東京帝国大学の教授で、小泉八雲の師としても著名な学者でした。師弟関係にあった杉浦藤四郎氏より、チエンバレンの旧蔵書を1958年に寄贈いただき日本学研究に役立てています。1961年・1990年目録刊行。

日本学研究所の業績を後世に伝える
チエンバレン・杉浦文庫

物館構想のもと、サテライト館やキャンパス内の遺跡を巡るコースも新設しています。気軽に行ける博物館として、市内外から多くの人を集めています。



瀬戸内海の干潟を再現

A portrait of Mr. Kenji Kinoshita, an elderly man with white hair and glasses, wearing a dark suit, light blue shirt, and a patterned tie. He is looking slightly to the left of the camera with a serious expression. The background is out of focus, showing a white curtain and a dark metal frame.

国立大学への
「評価」のあり方を
見直すことが
大切です。

日本学術会議 会長

金澤 一郎 氏

大人は子どもたちに
どう向き合うべきか

子どもたちを心身ともに健やかに成長させるためには、年齢によって大切なことが異なるという認識を大人が持ち、それぞれの時期にふさわしい対応をしていくことが重要です。

最初は乳幼児から幼稚園に入る前くらいまでの時期で、「安心」がテーマです。子どもとのコミュニケーションを図ることによって、人間というのは安心できる相手なのだということを分からせなければなりません。次は小学校入学前後から十歳くらいまでの時期で、ここで大切なのは「しつけ」です。世の中は自分の欲求だけでは回らないということを分からせ、欲求を抑えることを覚えさせ、十歳を過ぎたら「経験」が重要で、多少危険があっても、いろいろな経験をさせて知識や見聞を広め、たくましさや身につけさせねばなりません。

子どもは基本的にもすごい能力を持っているので、社会にうまく適応していけるかどうかは、それぞれの時期に、大人がいかに適切な対応や環境づくりをするかどうかに掛かっていると思います。

教育現場での創意工夫を
共有しよう

学校の先生たちは、よくやっています

しやる方が多いと思いますが、忙しすぎて、子どもたちと向かい合う時間が少なすぎるのではないのでしょうか。この点はそれぞれの学校で知恵を出しあつて、何とか改善して頂きたいと思います。

親について気になるのは、子どもの目の前で、先生の悪口、学校の悪口を言う人がいることです。これをやると、子どもが非常に迷い、成長して、高校生くらいになつても、実によくない影響を彼らに与えてしまいます。これは是非とも慎んで頂きたいと思います。

教育の現場では、さまざまな創意工夫がされています。朝の読書とか、発表とか、瞑想とか、いろいろあるでしょう。私は、そういう良い事例を発掘し、収集し、顕彰して、共有することに大きな意味があると思っています。小学校や中学校での先生方の前向きな努力と成果を皆で分かち合うことは、楽しく魅力的な学校づくりに少なからず貢献するのではないのでしょうか。

大学への「評価」が 混乱を招いていないか

国立大学が法人化されて5年が経過したわけですが、本当の意味で法人化の評価をするのは、私は、もう少し先だと思います。今の時点で気がかりなのは、国立大学が将来は民営化されていく組織と一緒に扱われていること

と、法人化によつて経済原理を導入しつつ大学の自立を促しているとしながら、文部科学省や関連組織が、実にさまざまな評価を国立大学に対して行っていることです。任期付きポストの割合、留学生数、英語での授業、21世紀COEプログラムにしてもそうです。大学にしてみれば、そのような評価項目があると、やはりやらなければいけないのではないかと、思つてしまうわけですね。ところが実際には、国立大学には多様性があり、存在理由も魅力点もさまざま、公的な高等教育機関としての使命もあります。それをひとまとめにして評価の物差しをあれもこれもと全部同じように当てはめると、大学の運営自体に混乱を生じさせてしまうのではないのでしょうか。

私は、国立大学に対する評価のやり方を変えるべきと思つています。大学側からも、評価についての率直な声をもつと上げるべきだと思います。現場からの問題点の指摘がないと説得力がありません。数ある国立大学をどう捉えて、どういう評価をしていくかが、これから十年、二十年先の日本のあり方を決めると言つても過言ではないでしょう。

その大学の特徴を明示して レベルアップを図ろう

国立大学全体のパワーアップのため

にも、まず、機能としてどういうグループに属する大学であるのかを明確にする必要があります。総合大学、地域中核大学、教員養成大学、大学院大学など、実態に即したいくつかの分類が考えられます。そして、それぞれのグループの中で然るべき目標を設定し、それに向かつて努力していくことが大切です。

機能別にグループを形成した各大学は、学生や教員の募集に際して、大学の特徴、役割、個性を明示することが求められるでしょう。その中の到達度やランキングならば、評価も実質的な意味を持つでしょう。それが、正しい方向性の中で各大学がレベルアップを推進していくことにつながると思います。

また、批判者ではなく、応援団としての評価者を置くことも大切です。大学の直接的な関係者だけではそういった人材が足りないのであれば、民間も含め、外部に適切な評価グループを作ることも、十分検討に値すると思います。

国立大学には、国として責任を持つて人を育てるという使命があるわけですから、学生が興味を持って学べる環境を作らなければなりませんし、学費負担も軽減させるべきではないかと思つています。

若手研究者への評価では 「面接」を重視したい

若い研究者たちを見ていて気になるのは、研究テーマを選ぶときに、どういう選び方をしたのかという点です。言い換えれば、研究者としてのキャリアパスや生活設計をどう考えて研究テーマを選んだのか、ということです。ポストクから任期付きポストへ就いてもその先がなかなか難しいということも影響しているでしょうが、できるだけ早く結果の出るテーマを選んで、次へのステップに進もうという短距離競走のような傾向が、近年強くなつてきているのではないのでしょうか。これは、前人未到のチャレンジングな課題に腰を据えて取り組もうという姿勢とは相反するものです。そうすると、スケールの大きい独創的な研究が生まれにくくなつてしまします。このことがとても心配です。

私は総合科学技術会議でも発言し続けているのですが、若い人たちの評価の方法を変えたいと思つています。出来上がったもの、論文になったものだけで評価するのはやめたい。面接をぶつかつて、それをどうやって乗り越えたかをよく聞いて、それを評価したらどうかと考えています。

困難を自力で乗り越えた体験を持ち、それを自分の言葉で表現できる人

O P I N I O N

は、次の世代の人たちにそれを伝えることができます。優れた指導者として下の人を育成することができるとして、この点を評価の重要なポイントにしたいと思っています。

「リベラル・アーツ教育」を再構築しよう

旧制高校の良かった点は、専門の全く異なる人も含めて「同じ釜の飯を食う」という人間的なつながりや、自分の好きなことを徹底的に学ぶことができるという自由な学問環境にあったのではないのでしょうか。私の世代では、教養部がそれに相当すると思います。専門を決める前のふわふわした時期に、幅広い学問に触れ、いろいろな友人と交わる。これは実に貴重な経験でした。

ところが、「大学設置基準大綱化」の影響で、それまで教養教育を担ってきた一般教育課程や教養部を多くの大学で改組・解体したことにより教養教育が弱体化し、ほとんどそのまま現在に至っております。これは由々しき問題だと思っています。若者が、教養として知っているべきことを知らないということは見逃せません。

世の中が混乱すればするほど、生きていく上での基礎基本となる「教養」が大切になります。また、専門分野での教育・研究を売り多いものにするた

めにも、豊かな教養教育が必要不可欠です。古典を重視する「グレートブック構想」や、現代的な個と全体の調和を追求する「サラダボール構想」も検討されるべきでしょう。是非とも大学において、リベラル・アーツを復活させなければならぬと思います。また、日本学術会議としても、国民全体の学術面でのリテラシーを向上させる施策を具体的に展開していくことが重要だと考えています。

「社会のための科学」と「科学のための科学」

面白いから勉強する、楽しいから研究する、ということが、科学の発展のためにはとても大切なのではないかと思います。そのとき、その人は、社会の役に立とうとは考えていないのかも知れません。しかし、古今東西の人類社会における知の創造と蓄積を振り返ると、社会のためとは考えずに研究し、その結果、大きな成果を挙げている例も少なからずあるわけです。

もちろん、学術研究のための研究費の原資は税金ですし、あらゆる資金は社会から供給されますので、広い意味で成果を社会に還元しなければならぬというのはその通りかも知れませんが、また、目の前の具体的な問題解決に寄与貢献するのも、科学の大切な使

命でしょう。しかし、あまりに性急に成果を求めると、基礎研究を含め、広い意味での科学の基盤が脆弱化することが懸念されます。

「社会のための科学」というときの「社会」を、百年単位くらいのスパンで捉えてはどうでしょうか。そう考えれば、「科学のための科学」と二項対立的にならず、現在、近未来、ずっと先の人類社会に、結局は寄与貢献していく科学という認識ができますし、そのバランスをマネジメントしていけばよい、という発想も生まれると思います。学術研究によって創造された知も広くいえば社会の財産です。

大学として科学に関する世の中への情報発信を強化することも大切です。国立大学の法人化前後からかなり盛んになってきましたが、これからもさらに努力を続けて頂きたいと思います。

若者は「学問」を楽しめ

若い人には、学問を楽しんでもらいたい。勉強すること、研究することは、もともと非常に楽しいものです。そして小さな子どもたちと同様に、いろいろなことを自分自身で経験して頂きたいと思います。自分の目で見て、自分の足で歩いて、自分の頭で考えて、その上でのを言う、という姿勢が大切です。もうひとつ望みたいことは、講義など

で聞いたことで面白いな、と思うことがあつたら、本物、つまり原典に当たって頂きたい。それがギリシャ語なら、ギリシャ語を少し学べばよい。原典に触れることは、後々必ず役に立ちます。自分の人生の豊かな基礎を創ることもつながると思います。



金澤 一郎 (かなざわ いちろう)

1967年 東京大学医学部卒業
1990年 筑波大学臨床医学系教授
1991年 東京大学医学部教授
1997年 東京大学医学部附属病院長
2002年 東京大学名誉教授
2002年 皇室医務主管(～現在)
2002年 国立精神・神経センター総長
2006年 日本学術会議会長(～現在)
2006年 総合科学技術会議議員(～現在)
2007年 国際医療福祉大学副大学院長(～現在)

北海道支部 帯広畜産大学

帯広畜産大学地域共同研究センターでは、平成20年度から、地域における公共的な課題や疑問について地域の方々から提起してもらい、同大学の研究者や学生とともに調査研究を実施し、その成果を広く公表する市民参加・駆動型の



落ち葉の堆肥化実証試験

街育プラザ事業

プロジェクト「街育プラザ」事業を開始しました。

平成20年度は6件の応募があり、3件の事業が実施され、発表会を行いました。

1. 野生動物の画像診断研究と地域に密着した生涯学習支援

おびひろ動物園と連携して、野生動物の画像診断検査などを実施し、野生動物などに関する最新の知見や人間生活との係わりについて生涯学習の一環として学習するための方策を検討・実施する。

2. 公園や街路樹から発生する落ち葉の堆肥化と資源の有効利用

地域や一般家庭で簡単に行える落ち葉の堆肥化方法について実証試験を行い、生物資源としての落ち葉の有効活用の普及を図るとともに、落ち葉の回収業務とそこから発生するゴミ量の軽減を目的とする。

3. 十勝の食材100選

十勝産の食材の旬、食べ方、歴史や物語を広く市民から収集し、地域循環型の食生活、農業と消費者との関係、フードマイレージなどの環境保全について、家庭や職場などの生活に密着した身近な場所で市民が議論を開始する端緒となることを目的とする。

東北支部 宮城教育大学

宮城教育大学では、平成16年度から、主に視覚・聴覚及び肢体に障害がある学生の支援に対応する「障害学生修学支援プロジェクト」を始動させ、話し相手の声をパソコンで文字情報に変換し画面に表示する「音声認識システム」を全国に先駆けて導入し、式典などに用いたり、パソコン要約筆記や講義を要約筆記するノートテーク・手話通訳などを講義に用いるなどの情報伝達の支援を行っている他、送迎用駐車スペースの確保や校舎のバリアフリー化などを推し進めてきました。

このたび、同大学では、当該プロジェクトに代わり全障害領域をカバーする教員養成大学として

障害学生支援室の設置

の特長を生かした「障害学生支援室」を平成21年4月に新設し、窓口の一本化、学生の相談に応じるコーディネーターや事務職員の配置、支援の申し出があった学生の障害種に応じた専門部会の設置、施設の改修及び設備の整備などにより、さらなるニーズの掘り起こしやきめ細かい支援を実施する一方で、障害者と健常者が共に生きる「ノーマライゼーション」を実践できる環境を整備

し、障害学生支援のモデル校を目指します。



「しょうがい学生支援室」看板を上掲する同大学関係者
(左から松崎准教授、吉田理事、高橋学長、中井副学長、勝島教授)

東京支部 電気通信大学

電気通信大学では、創立90周年記念行事の一環として歴史資料館を「UECコミュニケーション



1921年製モールス信号送受信機

UECコミュニケーションミュージアム開館

ミュージアム」としてリニューアルし、平成20年11月に開館しました。同大学の前身である無線電信



船舶搭載型衛星通信用パラボラアンテナ

講習所時代から最近までの歴史的な価値を持つ通信機器などを数多く展示しています。時代の最先端技術を集約した通信・放送装置、国際通信や船舶・気象・軍用通信に使

われた往年の通信機器、また、古い時代へのノスタルジーを感じさせるさまざまな真空管やエジソン蠟管蓄音機をはじめとするオーディオ機器なども数多くあり、これらを間近に体感できることがUECコミュニケーションミュージアムの特徴です。館内にはかつての通信演習教室を再現し、モールス通信を実際に体験できる展示室もあります。初心者から専門家、若者からご年配の方々まで幅広く楽しむことができる施設です。

詳しくは、<http://www.museum.uec.ac.jp>をご覧ください。ご来館をお待ちしています。

関東・甲信越支部 山梨大学

学生によるライフスタイル提案型まちづくり活動

山梨大学石井研究室をベースに、学生を主体に教員がサポートする活動組織NPDLは、甲府盆地の将来像として、魅力的な学生生活のスタイルを提案できる「環境学園都市」を掲げ、関連するさまざまなプロジェクトを立案・実行しています。

平成20年度は、将来のまちづくりを担う高校生に、自分たちが住む街への理解・関心を深め、まちづくりを考えるきっかけを提供することを目的に、高校周辺の街並みを模型で再現するワークショップ「身近なまちの今昔物語」を甲府市内の県立高校2校で実施し、その成果をシンポジウム

で報告しました。

平成21年度は、地元のバス事業者と協力して「新入生ウエルカムバスパス山梨」というプロジェクトを実施しました。これは、新入生に新しい生活の場についていろいろ知ってもらうために、

入学から1カ月の間、甲府駅から大学を含む一定範囲を自由に利用できる特別定期券を配布し、合わせて生活に関する情報を提供するとともに市街地活性化も目指しています。



バスの出発式



シンポジウムのポスター



高校でのワークショップ



東海・北陸支部 富山大学

4学部の「知」を結集して自立支援歩行器具を開発! (学部横断型の産学連携活動)

富山大学は、産学連携活動として人間発達科学部、医学部、工学部、芸術文化学部の4学部の教員6名が県内企業1社とともに自立支援歩行器具研究部会を設けて、高齢者や障害者の立ち上がりから歩行までを支援する自立支援歩行器具の開発を行っています。

身体運動工学、老人看護医療、人間工学、産業デザインの専門知識と技術を集めて製品開発を行うという、学部横断型の産学連携は同大学では初めての取り組みです。総合大学としてのスケールメリットを活かし、同大学の産学官連携コーディネーターが異なる学部のアイディア

をまとめ、同大学の研究と企業を結びつけ、商品化につなげました。

この研究開発は約1年半前から始まっており、このたび臨床用として試作した自立支援歩行器具が完成し、平成21年2月に県内の高齢者能力活用センターで、歩行器具2台と歩行車10台を

実際に障害者の方々に試用していただき、要望点や問題点に対するモニタリングを実施しました。

同部会では、マーケティング→構想設計→試作→モニタリング→臨床試験→製造販売の工程を順調に進めてきており、平成21年秋には販売開始の予定です。



モニタリング



開発した歩行器具



開発した歩行車

近畿支部 奈良先端科学技術大学院大学

未体験の知的興奮を伝える科学の祭典

「NAISTサイエンスフェスティバル」に約2,400人

奈良先端科学技術大学院大学（NAIST）は、平成21年3月14日、最先端の科学と触れ合い、知的好奇心を呼び覚まそうと「NAISTサイエンスフェスティバル」を開催しました。当日は、約



セグウェイ試乗を楽しむ参加者

2,400人が参加し、サイエンストークショー、セグウェイの体験試乗会、臨場感あふれる次世代高精細映像（4K映像）のインターネット伝送実験など盛りだくさんのイベントにわき、科学の祭典を満喫しました。

サイエンストークショーではタレントの眞鍋かをりさんが登場。乾准教授がコンピューターの自然言語やインターネットの検索について、島本功教授が花咲かホルモンについて、村井理事が「サイエンスは面白い」のテーマでそれぞれプレゼンテーションしながら、眞鍋さんの質問や意見に応じる形で展開しました。科学の最新のトピックスが

生活や経済と密接に結びついていることに眞鍋さんは「理系の人が作る技術と未来をもっと知りたいので、今後も教えてほしい。」と笑顔を見せていました。

また、「セグウェイ」の試乗会では、常に順番待ちの列ができるほどにぎわい、次世代高精細映像の伝送実験では、200インチの大画面に映しだされる、札幌雪まつりの模様に「雪に手が届きそう」などと目を輝かせていました。「科学は不思議だけど面白い」「研究には、とてつもない発見があるんだね」などの声が聞かれました。

中国・四国支部 徳島大学

公開講座の特色について

徳島大学では地域貢献の一環として、年間134の公開講座を開講し、受講者数は延べ2,893人（いずれも平成20年度）に上っています。これは国立大学では日本一の規模です。これらの講座は、昭和61年に設立された大学開放実践センターが実施しています。同センターは、大学開放部門4人の専任教員とともに、生涯学習係長、主任各1人、事務補佐員4人の事務スタッフで構成され、精力的に業務を遂行しています。特色ある講座として挙げられるのは、「ホノルルマラソンを走ろう」、「空海と歩く」、「市民ファーマー育成講座」などの実践型講座であり、座学とともに

ホノルルマラソン参加、歩き遍路実習、農作業体験を行っています。また、センター設立と同時に受講生の同窓会組織「六一会」が発足し、会員相互の学習や親睦とともにセンター業務の支援を

行っています。「六一会」は同大学同窓会連合会の一員として、各学部の卒業生との交流も行っており、この点も特筆すべきところだと思います。



農作業体験



歩き遍路実習

九州支部 佐賀大学

佐賀大学公認マスコット「カッチーくん」着ぐるみ誕生！

昨年末に、佐賀大学の正式なマスコットキャラクターへの昇格を果たした「カッチーくん」。昨年2月に同大学学生センターのホームページを学生に親しみやすくするために登場しましたが、ホー



学長室で長谷川照学学長とカッチーくん

ムページに生息するだけにとどまらず、ポロシャツのエンブレムやオリジナルハンカチ、マグカップ、エコバッグ、メモ帳などに着々と進出し、ついに、この度、「カッチーくん着ぐるみ」まで誕生しました。



就活カッチーくん

セミドリカッチーくん

ハロウィンカッチーくん

クリスマスカッチーくん

雪だるまカッチーくん

こたつカッチーくん

これから、同大学のいろんなイベントに参加し、同大学の知名度及び好感度アップのお手伝いをしていきます。

【カッチーくんのプロフィール】

名 前	カッチーくん
性 別	オス
誕 生 日	2月29日
年 齢	ひみつ
好きなもの	さがほのか(いちご)
苦手なもの	グリンピース、うめぼし
性 格	心優しく、天然系。でも好奇心は、鳥一倍

←これまでに同大学学生センターのHP上や広報誌に登場したカッチーくん

今、学生は！



大学では、自分なりに考えて
練習に取り組むというのが
大きな違いです。

長年低迷し続けてきた女子陸上競技の短距離種目が、近年めざましいレベルアップを遂げています。その動きを牽引しているのが福島大学陸上競技部で、数多くの日本チャンピオンを生んできました。青木さんは、このクラブでめきめきと実力を上げ、現役大学生として2008年北京オリンピック代表選手に選ばれました。今後も、福島大学を拠点に陸上選手としてさらなる発展を目指していきます。

福島大学陸上競技部

青木 沙弥佳さん



福島大学陸上競技部の躍進は、川本和久監督（福島大学人間発達学類教授）が赴任してきたときから始まりました。早くから科学的トレーニングに着目した川本監督の指導はとくに女子選手にめざましい成果をもたらし、1000mの二瓶（雉子波）秀子さんを皮切りに5人の日本記録達成者を輩出してきました。また、吉田真希子さん

（女子4000mH元日本記録保持者）など卒業後も福島大学を拠点に練習を続ける選手も多いほか、ジュニア向けの陸上クラブ「福島大学TC」の運営も行っており、福島県内における陸上競技の一大拠点となっています。

青木 福島大学へ進学を決めた理由は、高校卒業の進路ではいろいろ考えた

したが、最終的に「やはり一番私が輝けるのは陸上競技だろう」ということで陸上に打ち込める大学へ進むことを決めました。その際、高校の先生が「お前の種目（1000mH、4000mH）なら川本先生のところがよいのでは」と推薦してくださいました。福島大学には、大学生のほかに日本選手権決勝に出るようなOGの先輩方も練習されているので、自分自身そういったレベルの高い環境で練習を積みばより伸びる

だろうと考え決めました。
— 福島大学陸上競技部で、高校時代と一番違うと感じたことは？

青木 まず、先輩方が陸上に打ち込む姿勢が全然違いました。みなさん陸上が本当に好きで、試合だけでなく練習から真剣でした。また、高校時代はどちらかといえばやらされているという感じの練習でしたが、福島大学では先生がおっしゃられたことについて自分自身でひとつひとつ「なんでだろう」と考えながら練習するようになったことも大きな違いです。大学1年生の1年間だけで4000mHの記録が3秒以上伸びまし

編集後記

通常の本情報誌に加え、今号から別冊版を発行し、国立大学を取り巻く現状や高等教育の重要性についてお知らせすることにしています。第1回目の今号では、高等教育機関に対する公財政支出の対GDP比はOECD各国の中で日本が最小であること、また、高等教育費の伸び率は、OECD諸国中日本が唯一のマイナスであることを取りあげています。毎号異なる切り口から高等教育の実情を取りあげますので、ご関心いただけると幸いです。

国立大学の目指すべき方向

自主行動の指針④

指針4

ナショナルセンター・ リージョナルセンター機能の充実

国際的流動性の高まりと切磋琢磨の環境が進む中でも、国立大学法人全体としての役割が変わるわけではない。世界レベルの競争に打ち勝つ「ナショナルセンター」と、地域の活性化に貢献する「リージョナルセンター」の二つの普遍的な役割がある。

しかし、すべての国立大学がこの二つの役割を完璧に備えることは必須ではない。各大学において歴史的背景や地域社会の状況などにも依存し、高い比重を占める役割には差があって当然である。また、大学全体ではなく、大学の中の特色ある分野が、一方の役割を担うことも各大学の個性と考えられる。

今後も、国立大学法人全体としての使命は、まさにこれらの役割をより高度なレベルにおいて実現していくことにある。自らの特色を生かし個性的で魅力ある大学であるためにも、各大学が自ら選択した機能の充実を図ることに努力し続けねばならない。

- 4-1: 基礎的・基盤的研究活動の一層の活性化を推進
- 4-2: 全人类的課題解決に向けたプロジェクト研究を推進
- 4-3: 医療と人材養成などを通じて地域社会に貢献
- 4-4: 地域社会の活性化につながる知的・文化的拠点機能を充実

※青木沙弥佳(あおき さやか)昭和61年生まれ。岐阜県出身。中学時代より陸上競技で活躍し、福島大学に入学した平成17年に国体成年女子400mで優勝。平成20年の国体成年女子400mHで55秒94の日本学生記録(日本歴代3位)で優勝。平成19年大阪世界選手権、平成20年北京オリンピックでそれぞれ4×400mリレーの日本代表メンバーとして出場するなど、日本トップレベルの短距離選手として活躍を続けている。



たが、川本先生から理論を教えていただくことで「400mという距離の走り方」が少しずつわかってきたことも大きかったです。高校時代は「とにかく400mを走りきろう」といった感じで、ペース配分をあまり考えずに走っていました。

た。教育実習では苦手なバレーボールを教えているところに「オリンピック代表候補選手が地元で教育実習」と地元テレビ局まで取材に来てしまい、このときが一番大変でした。2008年は北京オリンピックという大舞台を経験されましたが、そのことによりご自身で得られた経験は？

青木 先輩方は、競技面での姿勢もそうですが、勉強も決して手を抜かずに取り組んでいましたので「私もあなりたい」と思いが

青木 オリンピックでは勝つというよりチャレンジャーという位置です。特別なプレッシャーはありませんでした。また、今回出場したのは4×400mリレーで、一緒に走るメン

のラップタイムは過去最高で、やるべきことはやった上での力不足だと思います。卒業後も福島大学を拠点に活動されるそうですが、今後の目標は？

2012年に行われるロンドンオリンピックと地元・岐阜国体までは現役を続け出場したいと思っています。また、福島大学TCで週2回子どもたちに陸上を教えるほか、移動講習会で陸上を教える機会もあります。こうした活動を通じて、陸上を好きな子が増えればと思いますし、私自身も陸上競技の楽しさを再認識できる機会になりますので、積極的に取り組んでいきたいと思っています。(平成21年3月取材)

一字の表意文字として表記するのが、漢字の「学」。
仮名では「ま(未)な(奈)ぶ(不)」と表音で表します。
音の豊かさ、そして言葉のしなやかさで心地よい音色を醸し出します。
筆：東京藝術大学 学長 宮田 亮平



社団法人 国立大学協会
The Japan Association of National Universities
<http://www.janu.jp>

編集・発行／社団法人 国立大学協会
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 TEL:03-4212-3506
JANU Quarterly Report
vol.13 July 2009